

目的 産業構造の変化や高齢化現象は家族意識を変化させ、地域の家族構造を多様化させてきた。本研究では、海女で知られる三重県南端の海女漁村における1972年と1992年の家族構成を比較分析し、どのような要因が家族に変動を与えてきたかを検討する。

方法 資料は1972、1992年の住民票に基づき、聞き取り調査により修正を加えた世帯票を用いる。

結果 対象地域では、近海漁業から遠洋漁業へ、さらに近隣産業、都市産業への就労と男子生産人口の働き先には大きな変化があった。女子は、海女のむらといわれるように漁業・海藻加工業の仕事が継続的にあり、パート就労の内容は変わっているが、就労は安定している。また、高齢者にも能力に適応した生業があり、親戚・近隣関係に支えられ、一家をあげての離村は少なかった。

その結果、人口、世帯数に大きな変化はみられないが、出生率の低下、高学歴化による若年層の離村傾向、都市での就労を終えた中高年の帰村などによって、世帯構造の変化とその内容にも変動がみられる。高齢単身・高齢夫婦世帯は増加し、直系家族にも高齢者親子の2世代型が増えている。また高齢者世帯は、子家族出稼ぎ中の留守役的であったが、子家族は帰村しない傾向が1992年では多くなってきている。

この20年の変動には、産業構造の変化による転職他出者と、学歴をつけて村外に他出就労し、定住した世代のライフコースによる違いが大きな要因をなしている。